

## パネルディスカッション

### 「これからの青少年育成活動の視点と展開 ―新たな一歩を踏みだそう―」

パネラー 永田 萌 氏

岩木 啓子 氏(ライフデザイン研究所 FLAP 代表)

渡久地広一 氏((株)JOTC 常務取締役、神戸センター長)

清水 勲夫 氏(野外活動協会専務理事)

コーディネーター

速水順一郎 氏(兵庫県青少年団体連絡協議会会長)

敬称略、文責:(財)兵庫県青少年本部)

**速水:** 「これからの青少年活動の視点と展開」というテーマで、取り組みとしてどう踏み出せばいいか、ということにつながるお話をさせていただくことが出来たらと思います。

まずはパネラーの皆さんに子どもの頃の夢、なりたいもの、やりたいことがあったか、それは何がきっかけで、というお話をご自身の紹介を兼ねながらしていただきたい。

**清水:** 野外活動協会を手段に、勤労青年職場定着、仲間作り、社会人教育を行う団体で仕事をしています。子どもの頃、特に夢は持ってなかったような気がします。毎日が楽しかったんです。居心地のいいところがたくさんありました。

今、何でもあるし、すべて一応選べる可能性のある職業、進路がありますが、「あなたには無限の可能性がある。」というセリフが、今の若者たちにとってはすごくストレスなのではないでしょうか。

**渡久地:** 子どものころは野球がうまくなりたいなあ、という夢を持って生きていました。小、中、高、大学まで競技者としての野球人生を送りました。大学を出て、地元の信用金庫で3年半ほど勤め、尼崎南部の町工場や中小企業を担当し現実の経済活動や世の中の真実というものを20才代後半まで学びました。今、職業訓練を行っている会社で、その時の経験を若い世代に伝えていきます。

**岩木:** 一言で言うと、参画と協働を推進する仕事をしています。環境教育とか体験的な学習の場に関わり、まちづくりの現場を応援し、人材育成の研修をするなど、フリーで仕事です。小学校高学年の頃、本を読むことと理科の実験が好きでした。小説家になると豪語していました。中学校に入る頃に公害問題、食品添加物が問題になり、大気汚染などの調査や添加物に関わる仕事をしたいと思い始め、大学では食品衛生学を学びました。そして、消費者教育に取り組みたいということで、今に続いているところがあります。

**永田:** 私は文章を書いたり、絵を描いたりする職業に就こうというような夢は持っていませんでした。ただ、自分の人生を自分の足で歩くということだけは強烈に感じていました。高校3年生のときに心から没頭できることは何かを考えて、幼い頃に夢中だった絵描く楽しみを思い出したんです。

就職するときは、子どもの頃の明快な夢、働く女性として自立した生き方をするということを実現したことになります。

**速水:** 次に、子どもや青年たちが、夢や目標に向かって暮らしていく、生活していくためには、今の社会というのはどうなんだろうか。何か欠けているものがあれば、何なんだろうか。ご自身の子ども頃と比較してお話をしていただけたらと思います。

**岩木:** 今、社会として、青少年に自信を持てるようにしてやる必要があります。そのためには、自分自身を信じられること、自分というフィルターを通して色んなことを判断していく、そのことが、それでいいんだよと言ってあげられる状況を作っていくこと、失敗が許容されていく世の中というのが大事だと思います。思い切りチャレンジして、失敗してでもリカバーできるような。

もう1点は、大人自身が自分たちの人生を生き生きと生きていくことと、一大人として子どもと本気で関わる、そういう中で育ちあっていくということが大事かなと思います。

**速水:** 確かに、周りと違う自分というのをなかなか出しにくい社会、何か違うことを思ってもできません。体験の機会も少なく、例えば、よそに家に泊りにいくという体験すらも最近ではなかなかできません。うちの家といとこの家が違うみたいな体験があって、許されることとしてはいけないことが違う、そんなことすら、身近なところで経験できなくなっています。本物の体験というと、よほどそういうプログラムに親が関心を持っていなければ、多くの子どもたちには機会がありません。

**渡久地:** 人生は敗者復活戦だと思います。成長の途中で若者たちが失敗してもその失敗を挽回するチャンスというものは大人が意識して設けることができる。子どもたちがトライできない、試行錯誤が許されないというのは、社会全体の責任だと思います。

平成15年ぐらいまでは、転職する若い人の理由は、自分の力を試したいとか、腕試しをしたという方が多かったが、ここ数年は、自分の行動や内面を変えるのではなく外部からの自分の評価そのもののリセットボタンを押したい、自分に悪いレッテルがついてしまい、リカバリー不可能だから、やめますという例が非常に多い。

若者にいつも言うのは、自分を変えずに外部環境を変え続けて行ったとしても得られる結果は同じだということです。(他者との比較による)勝ち負けではなく、(敵は我に在り、的に)自己ベストをライバルにして過去の自分を超越するようにしていけば、自然と力がつくのだからと言っていきます。

**清水:** 大人から子供たちに伝えるべきものの一つは、健全な判断がくだせる習慣です。判断力とか価値観とか姿勢とか、ときには魂とか、そういうものを伝えるのは、親が自分が生きた証を伝える場面だと思います。それを最近リーダーとか育成の方がしたりします。しつけとは、形ではなくて心のあり方を基本的には教えることです。そこの部分をすごく大人たちや親たちが回避しているのではないのでしょうか。

青少年活動で子どもがけがをすると親が飛んできて責任を追及するようになって、箱庭のようなプログラムが少なくない現状では、そこで健全な判断がくだせるような学習はどうするか至難の技ですけども、逃げるべきではないと思います。

永 田：今の子どもたちや青少年に接していてもっとも危惧することは、発想力が低下しているということです。子どもたちをほめるときに、大人にも発想力がないと、子どもたちの発想力に気がついてあげることができません。発想力の豊かなはずの子供時代にその発想力を養うことができないのです。

子どもたちをもっとほめましょう。そして、そのほめ方はうんと頭を絞って、その子たちがまだ気がついていないすばらしい発想力を持っていて、ものすごくユニークなことを考えたね、というようにほめてあげられれば、可能性がすごく広がると思います。

速 水：大人は、自分はもう完成されていて、子どもたちとは違うんだではなく、自分もまだ作っている途上だ、というような意識は非常に大事なことです。物事を決めてかかるのではなく、もっと広げて受け止めてやるのが大切です。

清 水：青少年本部の事業も青少年団体の事業でも、評価の物差しを考え直す必要があります。一つは、本当の成果はその子どもの後の人生でなければ出てこない、という見方をすること。もう一つは、家庭のくらしで失ったものを、育成の場に委ねても、親よ、あんた間違ってるよ、っていうふうには私どもの立場から言うべきです。1回の経験で効果の出るものと、その後家庭や地域のフォローがないとどうしようもないものがいっぱいあって、これを明らかにしてメッセージを出し直していく必要があります。

岩 木：青少年活動を作っていくとき、それをしたことによって何が起こったのかとか、どう進めていったのか(プロセス)に注目することが大事。青少年本部の中間支援機能では、プロセスを見たり、思いを形にしたりとか、マンネリを打破したり、自分たちの団体を上手に運営していくためのスキルを身に付けていただく機会を設ける等の、「ヒト、モノ、カネ」のコーディネート以外の支援機能も今後大事にしていていただきたい。

速 水：テーマに基づいて少し整理をさせていただきます。子どもたちが自信を持てるようにしてやる環境というようなものですね、それが非常に大事ではないでしょうか。

一つは発想力を豊かにしてやる。大人自身が発想力を豊かにする。その視点で子どもたちの発想、子どもたちの出来事を見てやる。それから、挫折する権利という表現をしていただきましたが、団体活動では、リーダーみんながそのことを共有して、そういう機会に子どもが当たったときに、しっかりと支えていくという支援体制を作っていくことが大事だということです。

2つ目は、大人が楽しく生きる、楽しく生きる姿を子どもに見せるということが非常に大切です。温かく生きているとか、心が温かい、これも共通する部分がある、皆さんの温かさでそういう仲間を増やしていただいて、そういう取り組みを是非していただきたいと思います。

3つ目は、本物の体験ということ。失敗体験、挫折、もちろん達成感というふうなことも感じることも出来る本物の体験ができる機会を是非作っていただきたいということです。

最後に、青少年本部の中間支援体制で、色んなプロセスもしっかりと持っていて、それが活用できるようにしてあげるとか、中でやっているとわからないものを外からしっかり評価してあげることも中間支援の役割に入ってくる、そういう取り組みをしていただきたいということです。